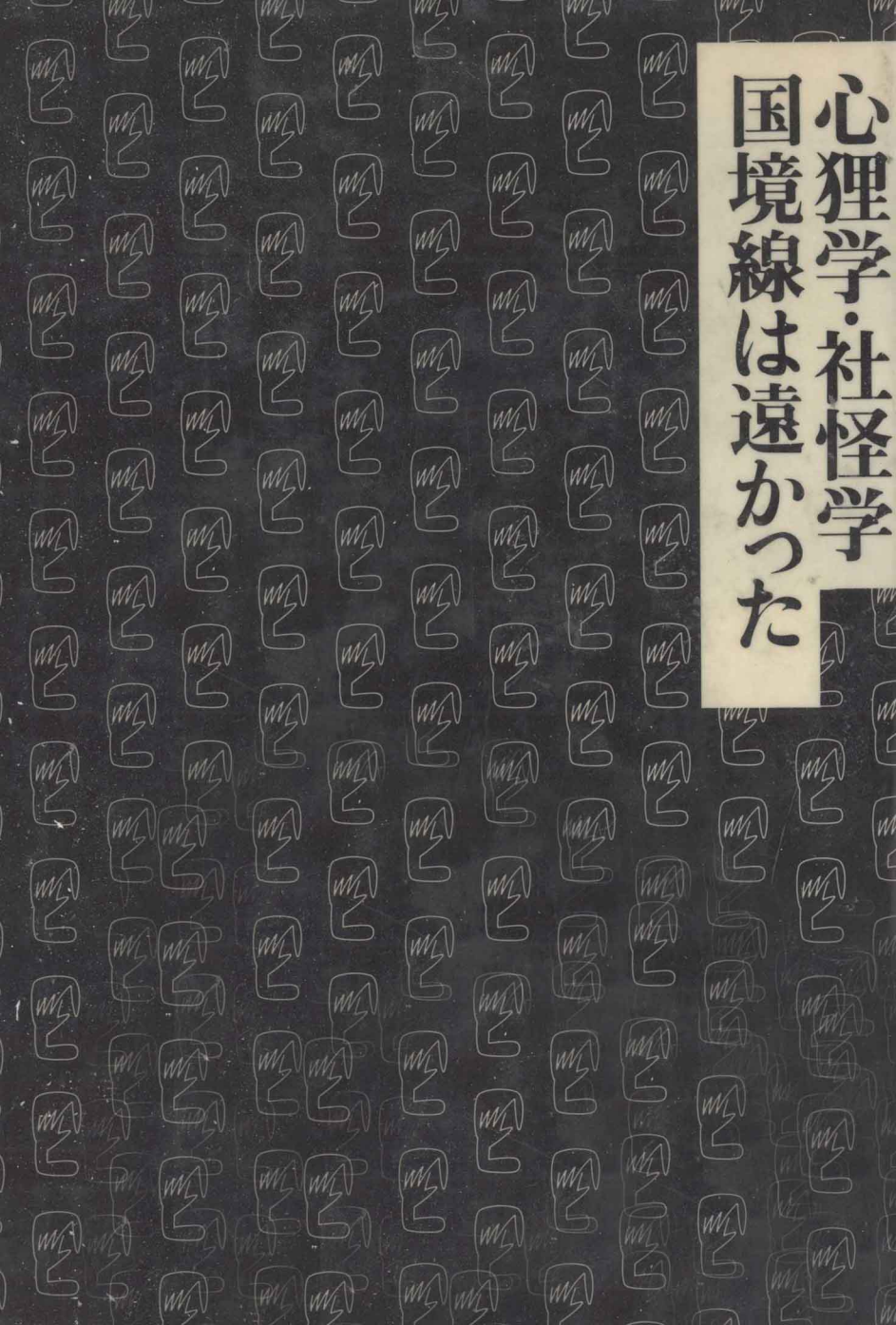


心理学・社怪学
国境線は遠かった





筒井康隆全集 8

心理学・社怪学
国境線は遠かった

新潮社

しんりがく しやかいがく こつぎようせん とお
心理学・社怪学 国境線は遠かった

筒井康隆全集 第8巻

昭和五十八年十一月二十日 印刷
昭和五十八年十一月二十五日 発行

定価一五〇〇円

著者 筒井 康隆

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一(〒一六二)
電話 業務部 東京〇三三六六一五一一
編集部 東京〇三三六六一五四一一

振替 東京四一八〇八番

印刷 大日本印刷株式会社

製本 加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小
社通信係宛御送付下さい。送料小
社負担にてお取替えいたします。

© Yasutaka Tsutsui 1983 Printed in Japan

ISBN4-10-644408-9 C0393

筒井康隆全集第八卷・目次

短篇連作 心理学・社会学

〔心理学篇〕

条件反射……………9

ナルシズム……………18

フラストレーション……………28

優越感……………37

サディズム……………46

エディプス・コンプレックス……………55

催眠暗示……………64

短篇

母子像……………135

穴……………149

〔社会学篇〕

ゲゼルシャフト……………72

ゲマインシャフト……………81

原始共产制……………90

議會制民主主義……………98

マス・コミュニケーション……………106

近代都市……………115

未来都市……………123

混同夢……………167

秘密兵器……………182

血みどろウサギ……………186

笑　　う　　な……………190

く　　さ　　り……………194

革命のふたつの夜……………207

国境線は遠かった……………225

フル・ネルソン……………249

エッセイ

「江美子ストーリー」の幸福観……………325

『東海道戦争』(サン・コミックス)まえがき……………328

貴　　様……………329

突　　拍　　子……………330

自動コジ機……………331

ナンセンス……………332

レモンのような二人……………262

巷談アポロ芸者……………274

泣き語り性教育……………289

悪魔を呼ぶ連中……………305

コ　　レ　　ラ……………308

おこらないおこらない……………333

欠　　陥……………334

読　　書　　遍　　歴……………335

ギャグ・マンガ……………339

ストーリー・マンガ……………341

安　　保……………345

解
説

スキャンダル……………	346
西部劇……………	348

異
孝
之

作家経営学……………	350
------------	-----

心狸学・社怪学

国境線は遠かった

装
幀

山
藤
章
二

短篇連作

心理学・社怪学

〔心理學篇〕

条件反射

1

気がついたとき、おれは病室らしい白い部屋のベッドに寝かされていて、医師団と見える数人の白衣の男がおれをのぞきこんでいた。

「完全に意識をとり戻しました」と、首魁らしい男がいった。「もう大丈夫です」

きつと大手術だったのだろう。そうにきまっている。おれの運転する車は立体交叉のいちばん上のハイウェイのガードレールをぶち壊して下のハイウェイに墜落し、やってきたダンプにはねとばされたのだ。そこまでは憶えている。あの時は、もう死ぬのだと心にきめ、まさか生きかえるなどとは思わなかった。ところが生きかえってしまった。それはいい。だが、いつたいどんな生きかえりかたをさせられてしまったのだらう。意識を回復して、まずいちばん先に考えたことはそれだった。五体満足のままで生きかえつ

たなどというはずはない。おれはスタイリストだから、ひどい不具になるよりは死んだ方がましなのである。いったい、どこをやられたのだろう。片足か。片腕か。それとも両足か。両腕か。まさかダルマじやあるまいな。

まだ口はきけないから医者に訊ねることもできず、おれはシーツの下で、おそろおそろ腕を動かしてみた。両方とも、あるようだ。次に両足を動かしてみた。これもあるようだ。しかし切断後しばらくは、切り落した四肢の感覚が残っているというから信用できない。

数日後、やつと口がきけるようになった。

「きつと、大手術だったんでしようね」ある日おれは、ベッドの傍へやってきた医者にそう訊ねた。

「もちろんです」医者は、なんとなくうしろめたそうな様子でうなずいた。「あなたがここへかつぎ込まれてきた時は、それはもう、ひどいものでした」

「ところで、わたしの五体は満足ですか」

「満足です」と、医者はいった。「外見上は、他の人と何ら変るところはありません」

「外見上はですと」おれは聞きとがめた。「ではない、どこがどう変ったというのです」そういつてしまつてから、おれはあわてて眼を閉じ、はげしくかぶりを振った。「いや、いや。言わないでください。聞きたくない。聞きたくない」

「しかし、お教えしないわけにも」

「聞きたくないんだ」と、おれはわめいた。

「そうですか」医者はうなだれた。「いずれ、おわかりになるでしょうが」そして、病室を出ていった。

翌日、妻が見舞いにやってきた。「あなた。手術が成功してよかったわね」

「よかったかどうか、まだわからないよ」と、おれは無愛想に答えた。

「あなたのことが、新聞に大きく出てるわ」

「そりゃ、そうだろう」

おれは剣持大助という流行作家である。有名人が事故を起したのだから、新聞に大きく載るのはあたりまえだ。

「毎日出てるわ」と、妻はいった。

「毎日だ」とおれは首をかしげた。

「そりゃそうよ。だってあなたは、わが国で最初の妻は、いいにくそうに、もじもじした。」

悪いことにちがいない。

「その先はいうな。聞きたくない」

「でも、どうせわかることなのに」妻は泣きそうな顔でうつぶいた。

どうやら、臓器の移植手術をしたらしいことだけは、想像することができた。だが、それ以上のことは考えたくなかった。おれ以外の人間はみな、その詳細を知っている。

知らないのは本人だけだ。だがおれは知りたくなかった。今知ると、ノックで回復が遅れる。おれは早く退院したかったのだ。

「記者会見をしていただけますか」翌日、医者がきてそういった。「みんな、集まっているんです」

記者たちに嫌われると商売上まずいから、おれは会うことにした。手押車で応接室へ行くと記者やカメラマンが十数人待っていた。

「剣持先生。調子はいかがですか」

「たいへんよろしい」と、おれは答えた。「今日にでも、退院できそうです」

「食欲はありますか」

「あります。腹が減ってしかたがない」

「それはそうでしょう」と、ひとりの記者が心得顔でうなずいた。

全員がくすくす笑った。

「じつは」傍にいた医者たちの首魁が、不審顔のおれにそつと耳打ちした。「ブタの胃袋を移植したのです」

ううむ——と、おれは呻いた。移植することにこいてブタとは。おれに、このスタイリストのおれに。死んだ方がましだった。恐れていた事態の中の、最悪のものだった。絶望に、おれの眼の前は暗くなった。

「性欲はありますか」おれの様子にはおかまいなく、記者

たちはさらに不躰に訊ねた。

「まだわからないよ」

「人間の看護婦に、色気を感じますか」

「失敬なことを訊くな」と、おれは怒鳴った。「たかが胃袋ひとつ移植しただけじゃないか。それなのにブタあつかいするのか」

「じつは先生」と、横から例の首魁が口を出した。「心臓は、イヌの心臓を」

「イ、イヌだと」おれは驚いて眼を見ひらき、われ知らず舌をだらりと出してぜいぜいあえいだ。

カメラマンどもが、チャンスとばかりシャッターを切った。

「なんてことをしてくれた」おれはわめいた。「おれのイメージがぶち壊された。どうして人間の臓器を移植しなかったのだ」

「ことは急を要しましたし、手近にストノクがなかったのです」首魁はおれの激昂ぶりにおろおろしながら、そう弁解した。「先生の才能を大切に思うあまりのことです」

「死んだ方がよかった」おれは叫び続けた。「どうして死なせてくれなかった」

「しかし先生は、わが国臓器移植学界に大いなる貢献をなさったのですよ」と、記者のひとりが、冷やかすようにいった。

「そんなもの、くそくらえ」おれはわめきちらした。「臓器移植の進歩など呪われろ」

「医学界だけでなく」と、医者がいった。「これは世界の心理学界からも注目を集めています。先生にどういう反応があらわれるであろうかと……」

「人の身にもなってみろ」おれは泣き出した。「くそつ。ひとのからだだと思いやがって、オモチャにしやがって」

「でも先生はSFをお書きでしょう」と、つんと上品ぶった婦人記者がいった。「だったら、こういうことにはもっと協力的になっていただかなくては」

「やかましい」と、おれは怒鳴った。「なんだ、その言いかたは。そんなことはおれの自由じゃないか。協力などしてやるもんか」

昂奮のあまり、おれは足でどんだん床を蹴りながらわめき続けた。

ふと、記者たちがおれの足を指してくすくす笑っているのに気がついたので、おれは足の動きをとめた。

「あもう、じつは……」と、首魁がいった。

「まだあるのか」おれは悲鳴をあげた。

「あもう、肝臓はウマの……」

「ウ、ウマだと」

「いえ。しかしこれは、ただの馬ではありません。サラブ

レッドの当歳馬の……」

「サラブレッドだろうと何だろうと、ウマはウマだ」おれは泣きわめいた。「ああ。おれは人間動物園だ」

次の日の新聞には、泣きわめいているおれの写真入りで、こんな記事が載った。

『人間動物園だと叫び

泣きわめく剣持先生』

2

臓器移植に關しての論議は、否定肯定とりまぜて、もう十数年も前から活潑に行われていた。そのいずれの場合も、提供する人ともらう人の人格尊重という点を重要視していた。だが、提供者の人權を重んじる論議の方が、もらう人のそれに比べて常に重大問題であった。臓器をもらう人間の方は、なんといつてもそれによって命が助かるのだから文句のあろう筈がない——そういう考え方がマスコミや医学界を支配していたらしい。事実、手術後のごたごたはたくさんあったが、そのほとんどは提供者の側から起つていた。中には奇特な人たちが臓器委託提供者組合などというのを作ったりしたもの、これとて小人数の上、もちろん提供を承諾した者がいつ死ぬかわからないので急場の間にはあわないし、老人になつてしまえば臓器も老朽化して移

植不可能。

そこで研究されはじめたのが人間以外の動物——つまりイヌ、サル、ブタ、ウマなどの臓器の移植だった。これなら臓器譲渡権の問題もなく、すべては金で解決できる。もらう側の人間の尊厳を傷つけるのではないかという意見もあるにはあったが、なにしろ外科医たちは夢中で研究を続けていて、そんなことには耳を貸そうとしない。一般の世論やマスコミも科学の発展という錦の御旗を押し立てて有形無形の援助をしたため、研究はどんどん進んで理論的には可能という結論も出、あとは実際の手術をいつ、だれが、どこで最初にやるにかかっていた。

思えばおれも、悪い時に事故を起したものである。もちろん内臓ぐじゃぐじゃ意識は不明、移植の可否を本人に訊ねることはできないので、あの医師団の首魁は妻にお伺いを立てたらしい。妻としては小学校一年の男の子ひとりかかえて後家になつてはつまらないから、ブタだろうがウマだろうが、なんでもいいから生き返らせてくれと頼んだらしい。そこは女の浅慮さ、夫のプライドのことまでは考えなかったのである。おれは腹を立てたものの、妻が承諾したというのでは、病院や医者に対して人權侵害の訴訟を起すこともできない。その代り退院して家へ戻るなり、思ひつきり妻をぶんなぐつてやった。

退院してからが大変だった。病院ではマスコミ攻勢を医

師団がバリケードとなつて防いでくれたのだが、家へ戻れば孤立無援である。朝から電話の鳴りどおしで、これは受話器をとらない限りいつまでも鳴り続けている。とればとつたで、これからそっちへ伺います、来るなどいつてもいや行きます、お手間はとらせません、来いといえればテレビ新聞週刊誌の記者たちがカメラマン同伴でやってきて、妻や子供まで質問攻めである。また、術後の経過を看るための医師団の定期往診の日など、家の内外庭から道路にかけて記者団と野次馬がてんやわんや、これでは仕事も手につかない。

たまに散歩に出かけても、何かおかしなことをやらないかと鵜の目鷹の目のカメラマンがあとを尾けまわし、うるさいことこの上なしである。

そこへもつてきて、ある日医師団といっしょに心理学会の先生たちがやってきた。

「ぜひ、実験させていただきたいのです」と、彼らはいつた。「イヌやウマの臓器を移植した人間が、その行動と心理にどのような変化を起したかを知りたいのです。わが国の科学の発展と進歩のため、ぜひご協力を」

この時はついにおれの堪忍袋の緒もぶつとりと切れ、すつくと仁王立ちになって学者たちを怒鳴りつけた。「おれは人間だ。ハツカネズミでもなければモルモットでもない。だいたい科学の発展とやらないお題目が気に食わん。それ

さえ謳ええばマスコミ大衆が盲目になることを勘定に入れての学者面。ええもう我慢できない、出てけでてけ」

机振りあげふりおろし、茶碗投げつけ蹴とばして、ここを先途と荒れ狂ったから、学者茶だらけ医者灰だらけ、肝をつぶして逃げ帰っていった。

もちろんこのことは新聞や週刊誌で大きく報道され、事実を歪曲したセンセーショナルな記事となった。

『科学の発展を呪う剣持大助！』

咆哮とともに荒れ狂う二時間』

『凶暴性は動物臓器移植の影響？』

南城博弥心理学教授・談』

この時を境として、マスコミの報道はすべておれに対する悪意に満ちたものに変つた。たとえばおれがヒステリーを起した時の記事の中には『ヒンヒン嘶きながら』とか『牙をむき出して』などの文章さえ見られたし、医者や学者はテレビ出演や雑誌の座談会のたびに、おれを『科学の進歩に偏見を持ち、命を救われた恩に報いようとしないう格破綻者』などと口を極めて罵つたりした。

また、小学校一年になる子供は、近所の子供たちに『雌犬の息子』などと嘲笑され、泣いて帰ってきたりした。おれの心臓は雌犬のものを使っているからだ。だがこれもあとで聞くと、女性週刊誌の記者が近所の子供にペロペロ餌を買ってやり、そう言えと教えたらしい。もちろんその週

刊誌には、こんな記事が載った。

『メス犬の息子と笑われて泣く』

劍持大助の長男・健一くん』

マスコミや大衆は、常に誰か有名な嫌われ者がいてくれることを喜ぶ。大つばらに非難できる、いわばマスコミ的悪人がどこかにいないと承知しない。おれはその点、もとからある程度有名だったし、古風な男権論者だったから一部のインテリ女性にはもともと白い眼で見られていたの
で、マスコミ悪人になる素質は充分あった。そこへこの事件である。おれはたちまち大悪人のレノテルを貼られ、得意先だったマスコミは一転しておれの敵と変った。世間は狭くなり、妻は近所から白眼視され、親戚はやってこなくなつた。

だが、もし仮に、おれが心理学者たちのテストを受けていたとしたら、これほど騒がれることはなかっただろうかいや、おれにはとてもそうとは思えないのである。悪人にはされぬかわりに、道化にされたに違いないのである。それこそおれの最も嫌うところだ。悪人であつた方がどれだけましかわからない。今でさえ、実験もしないのにおれの動作をひとつひとつ解説し、やれこれはイヌの心臓を持ったための条件反射でござるの、やれこの間違いはウマのよくやる試行錯誤でござるのと、直接会つたこともない学者までが喋つたり書いたりしているのだ。

もしテストを受けていたら、けだものたちの臓器がおれにやらせるあの奇妙な行動が明るみに出て、人間扱いされなくなつたかもしれないではないか。

そう。むしろ、今おれがいちばん悩んでいるのは、それなのである。

3

昔、おれが作家になる前のサラリーマン時代、恐妻家である有名な係長がいた。この係長、夜ごと細君へのサービスが過ぎて昼間会社でよく居眠りをする。

「そら。また始まつたぞ」

同僚下役くすくす笑いあう中で、この係長自分の椅子にきちんと腰をおろしたまま舟を漕ぎ続けるのである。

おれたちは条件反射の実験と称し、居眠り中のこの係長によくいたづらをした。耳もとに口をよせ、彼の細君の声音を使うのだ。

「あなたつ。ねえ。あなたつたらあ」

するとこの係長、夢うつつの状態のまま、ぎくしゃくと腰を使い始めるのである。その様子の滑稽さ、哀れさ、異様さ。おれたちは涙を流し腹をかかえ、笑い声を立てま
いとするとに苦労した。

施験者にとって、条件反射の実験ほど面白いものはない。